

在宅

医療と介護の今

今号の主な内容

- コロナ禍での地域ケア会議、オンライン形式を軸に検討 — 令和3年度の全体会開催…………… 1面～2面
- 多職種連携 ICT システムの稼働へオンライン会議 — 活用のメリットや意義を訴える…………… 3面～4面

■ コロナ禍での地域ケア会議、オンライン形式を軸に検討—令和3年度の全体会開催

今後さらに増えると予想されている在宅医療の需要に対し、いかに在宅医療と介護が切れ目なく一体的に円滑に対応していくか。そのために欠かせない「医療」と「介護」の連携を推進する杉並区在宅医療地域ケア会議（以下「地域ケア会議」）は、令和3年度で第4期（1期2年）に入りました。新年度の方針を検討する全体会議（7圏域のリーダー医師と企画運営委員の合同会議）は、毎年度初めに開催されてきましたが、コロナ禍の影響で今年は8月6日に初めてオンライン形式での開催となりました。圏域ごとのグループワークでは、地域ケア会議をオンラインで開催することを軸に検討する方向が示されました。今期の各圏域のリーダー医師（顔写真）と主任ケアマネ（集合写真）は以下のとおりです（カッコ内は圏域名）。



川瀬直登医師（井草）



服部雅俊医師（西荻）



赤井知高医師（荻窪）



塩田正喜医師（阿佐谷）



小島 淳医師（高円寺）



森谷泰和医師（高井戸）



入谷栄一医師（方南・和泉）



7圏域の主任ケアマネジャーの皆さん

●令和2年度の開催は4圏域のみ

冒頭あいさつした稲葉貴子杉並区医師会会長は「東京都医師会の地域医療推進委員会では、杉並区地域ケア会議が先進的な取組として評価されている。始まってから6年が経つが、地域医療と多職種の連携をさらに進めてほしい」と述べました。

事務局の在宅医療・生活支援センターの報告によると、新型コロナウイルス感染拡大の影響で令和2年度の地域ケア会議の開催は、井草、西荻、荻窪、高円寺の4圏域にとどまり、阿佐谷、高井戸、方南・和泉では開催を見送りました。その結果、参加者数は222人と、令和元年度の1,077人（コロナ禍で一部開催を見送り）、平成30年度の1,513人から大幅に減少しました。職種別では薬剤師とケアマネジャーの参加が多く、次いで看護師・保健師・リハビリ職、ケア24、医師などの順でした。

事務局から示された令和3年度の地域ケア会議の実施案では、(1)各圏域とも1回以上の開催とする、(2)1グループ10人を超える対面によるグループワークは好ましくない、(3)オンライン形式の開催も可能、(4)開催テーマは従来の退院支援、日常の療養支援、急変時の対応、看取りの4つの場面に加え、「コロナ禍における」これら4つの場面から選定する一などが示されました。



会議資料を説明する事務局

●オンライン開催で情報共有を

前記の実施案をふまえて、圏域別に今年度の地域ケア会議の開催・運営について話し合いが行われました。主要な項目は開催テーマと開催方法です。グループワークの結果、「『コロナ禍における日常の療養支援』をテーマとする方針だが、一堂に会しての会議は開きにくいので、どのように情報共有するのか課題を出し合って話し合いたい。オンラインと会場に分けて開催することも検討」（井草）、「オンライン開催を考えているが、多職種、特に医師が関心を持てるテーマも検討したい」（西荻）、「コロナ禍での各職種の対応についてアンケート調査を行う予定。その結果をもとに話し合いをしたい」（荻窪）などの報告がありました。

また、「コロナ陽性患者・濃厚接触者・自宅療養者のケア、介護者に入院治療が必要となった場合の、要介護者本人のケアをどうしていくかを話し合いたい」（阿佐谷）、「昨年度は対面形式で開催したが、参加者には好評だった。今年度は看取りをテーマにオンラインを含め検討する予定」（高円寺）、「コロナ禍で情報を得る機会が減っている。同じ職種同士で集まり、情報共有する提案もあった。地域ケア会議は年内に開催したい」（高井戸）、「各専門職が抱える悩み、必要としていることを話し合い、多職種の連携につながれば」（方南・和泉）などの意見も紹介されました。



オンラインで話し合う全体会議

●医師の参加を増やしたい

各圏域のリーダー医師からは「医師の参加が少ないので、増やせるような形を考えたい」（西荻）、「過去1年間で事業所の方や地域の方と実際に会って話す機会が減った。こういう時だからこそ、地域ケア会議を通じて連携を深めたい」（阿佐谷）、「医師の参加が少ないが、オンラインであれば圏域以外の医師にも参加を呼び掛けてもよいのでは」（高井戸）など、医師の参加を増やす意向が示されました。

■ 多職種連携 ICT システムの稼働へオンライン会議 — 活用のメリットや意義を訴える

令和3年度から在宅医療・介護関係者に向けて導入された「杉並区多職種連携ICTシステム」。高齢化の進行に備えて、杉並区医師会（以下「区医師会」）が導入を決めた経緯については本紙23号で取り上げました。現在は、本格稼働に向けた準備が、区医師会ICT小委員会を中心に進められています。トライアル使用の取組と並行して、利用対象者・事業者に向けたオンライン会議などを積極的に行うことで、利用者の拡大に努めています。

● トライアル使用拡大開始の「杉介ネット」

杉並区多職種連携ICTシステムには、医薬品や在宅医療機器の製造・販売を行う帝人ファーマが開発したバイタルリンク(Vital Link)というシステムが採用されています。愛称は「杉介(すかい) ネット」と決まりました。すでに数年間多職種連携システムの活用で実績があるまごころクリニックの山口優美医師や、以前開業していた地域の医師会の情報管理者をしていた杉並PARK在宅クリニックの田中公孝医師らが、今年8月中旬から簡易手引きを用いてトライアル使用拡大を開始しました。

バイタルリンクに係る多職種連携オンライン会議は、区医師会のICT小委員会の山口・田中両医師を中心に8月31日と10月6日の2回、開催されました(3回目は11月15日開催)。予めデモ映像を作成しておく、グループワークのため参加者を小グループに分割する、などの技術的なサポートについては、先行してトライアル使用しているウォームハート(定期巡回・随時対応型訪問介護看護等)の戸嶋哉寿男さん、ICTに詳しいホウカンTOKYO荻窪(訪問看護リハビリステーション)の河田浩司さんらの支援があったそうです。

● オンラインでつながる嬉しさを実感

1回目の多職種連携オンライン会議は、「バイタルリンク活用について」がテーマ。開催側がケアマネジャーや看護師らに個別に参加を呼びかけ、60人が参加しました。シス



模擬オンライン退院時カンファレンス

私たちはその「一報」を受けて・・・

チーム＝専門家集団を速やかにつくりたい
でも、皆様それぞれに大変忙しいのが現状です
キャッチした情報はチームで速やかに共有したい
留守電やFAX情報を確認して欲しいが直接連絡取れず

休前日、帰りがけの電話
そして魔の週末

正しく
速やかな
情報連携

数か所のデイトに通過している方の発熱
通所先の感染者情報

週明けのサービスの手配や退院支援が急務なのに
誰にも連絡が取れないという現実に泣いています

ケアマネの立場からも必要性を訴え

テムを実際にはどのように使うのか、使用シーンをイメージしやすいように、山口医師や戸嶋さんらが、仮想の患者を設定したデモを行いました。続いて、田中医師が「医療介護ICTの実際について(メリット・デメリットを中心に)」、杉並区ケアマネ協議会の相田里香会長が「ある事例を通して、もしもバイタルリンクがあったなら…」について、それぞれ講演を行いました。その後小グループに分かれて、ICTを使うことへの不安や期待することなどをテーマに話し合い、最後は帝人ファーマの担当者が参加者の質問に答えるという進行でした。

参加者からは「システムに対する理解が深まった」「利用してみたい」などの感想が述べられ、開催側は普及につながる手応えを感じたといいます。久しぶりに顔の見える会議ができたことを喜ぶ声が複数あり、コロナ禍で制限された対面コミュニケーションは多職種連携の場でも切望されていることが伺えました。

山口医師は「説明会終了後は、杉介ネットの中に『オンライン会議参加者の部屋』を作り、フォローアップをしています。すでに使っている方が困りごとを書いてくれることもあり、利用するうえでの気づきを共有しています」と話します。

82人が参加した2回目は、相田さんがケアマネジャーの苦労話を具体的に紹介しました。その典型例が休前日(祝日の前日や土曜日)の夕方などに利用者の容態変化を知ったときに、連絡したい相手が見つからずに苦労することです。こうした状態を改善するためにも杉介ネットを活用することに意義があることを訴えました。

また、杉介ネットが持つZOOM機能を活用したオンラインによる退院時カンファレンスのデモも行われました。仮想の患者のイラストを手にして山口医師が患者役を演じ、病院側と在宅医療・介護側の双方のチームが集まって模擬の

ZOOM会議を披露しました。会議には遠方に住む患者の家族も参加し、それぞれの場所から参加できるオンラインのメリットをアピールしました。

● 課題は病院との連携

杉介ネットの立ち上げを主導する区医師会理事・安田正之医師は、今後の課題として病院や行政との連携を挙げます。「医療連携室から杉介ネットが使えるようになった病院はあるのですが、杉介ネットを病院のシステムにつなげることはセキュリティの問題があり、大変ハードルが高いです。ですから、2つのシステムをつなぐのではなく、併用しながら医療連携室経由でオンラインカンファレンスなどができるようにすれば、と期待しています」。安田医師は、今後、

システムの登録者をサポートする事務局を医師会内に整備するとともに、正式なマニュアルを作成・配布したいといいます。システムの利用者登録（アカウント数）は、7月には29だったのが、10月には86まで増加しました。現在、登録を検討中の事業者もあり、今後のさらなる増加が期待されます。これからも多職種連携の強化に向け、ICT小委員会の活動が続きます。



取材に応じる安田正之医師と山口優美医師

令和3年度版 杉並区在宅療養ブックを発行しました。

オレンジ色の表紙が目印!

在宅療養を支える医療機関や介護事業者等の情報を掲載しています。配布場所は在宅医療・生活支援センター（ウェルファーム杉並）、介護保険課（杉並区役所）、各ケア24などの窓口。在宅療養をされている方、在宅療養を支援している方など多くの皆様に活用していただきたいです。



在宅医療・介護保険サービス事業者・地域の集いの場情報検索システム

高齢者やその家族などが、在宅医療や介護が必要になったとき、地域の集いの場を探したいときにご覧いただけます。スマートフォンからも利用できますので、ぜひ、ご活用ください。

アクセス方法

- 直接URLを入力する
<https://carepro-navi.jp/suginami>
- 杉並区公式ホームページ
<https://www.city.suginami.tokyo.jp/>から
『在宅医療・介護保険サービス事業者・地域の集いの場情報検索システム』と検索

二次元コードはこちら



在宅医療 相談調整 窓口

在宅医療をサポートするため、相談員が区民の皆様や医療・介護・福祉の関係者の皆様からの在宅医療に関するさまざまな相談をお受けします。

杉並区在宅医療・生活支援センター

- 電話：03-3391-1380（直通）
- 受付時間等：月～金曜日（祝日・年末年始を除く）
午前8時30分～午後5時

★次号は令和4年3月発行予定です。